

＜今日の説教のポイント ルカによる福音書1章26～38節＞
マリアへの受胎告知の出来事。ここから聞き取るべきことは。

1 処女受胎なんてあり得ない？ あり得るとしたらどんな場合？

初めて聞くとあり得ないと思う処女受胎の話です。しかし、天使ガブリエルが言ったように、「**神にできないことは何一つない**」(37)ことを認めるなら、処女受胎はあり得る話に変わって来ます。問題は神様はなぜ処女受胎を起こされたのかです。それを追わなければならないのです。私たちの思いを超えた全能なる神様が起こされたことを考える時はいつも、「How どのようにして」ではなく「Why なぜ」を問うことの方が重要なのです(35節が「聖霊によって」という言い方で、Howに関する一切の問いは「神の力」で理解できる、と告げていると言えるでしょう)。

2 福音書記者ルカは神様の周到なご計画を思い、伝えようとしている。

「六か月目に」(2)という言葉から始まります。それはすぐ前の「**五カ月の間**」(24)から来ており、高齢の不妊の女エリサベトが身ごもった時が起点になっています(36)。この後マリアはエリサベトを訪ねて、自分に起こっていることが神様によって起こされたことを確信します。福音書記者ルカは、マリアが自分に起こったことを信じられるように、神様が用意周到に準備されていることに気づいたのでしょう。この先、神様が彼女たちを用いて与えて下さった二人の子、ヨハネとイエスがこの先どのようになり、何を語り何を為すのかが重要であることとなります。ルカはそのことを66節で語り、67節以下のザカリアの預言で予告していますが、予告を超えた深い内容が語られています。見ておきましょう。

3 マリアの姿から教えられることは？ 神様を信じて生きて行くこと。

マリアは天使の言葉に戸惑い(29)、信じられない思いをありのまま天使に伝えました(34)。マリアは私たちの代表なのです。私たちと同じ人間であるマリアが偉かったのは、その後、天使の言うことを聞いて、「**私は主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように**」(38)と言って、天使の言ったことを受けとめて歩み続けたことです。私たちも同じです。分からないことは一杯ある、しかし、それらも神様のみ旨の中にあることと思って歩み続ける。そうするなら、いずれ神様の言葉は成り、分かる時が来る。そう思いながら、マリアが初代のキリスト者と共に生きたように、私たちも主の教会の民に加わり、聖書の神様の言葉に聞きながら生きて行くけばいいのであり、またそれが大事なことなのです。